

「正義」よりも大切なこと

奨励	小林　よう子〔こばやし・ようこ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団眞面教会牧師

「あなたがたも聞いており、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」

（マタイによる福音書　５章43―45節）

「正義の味方」は
カッコいい

世の中には様々な価値観がありますが、「正義」といえば、ほぼ絶対的に認めざるを得ないものではないかと思います。少なくとも、すべての人にとって公平であり、誰が見ても正しいことを「正義」というのです。

子どものころには、まだ何が「正義」なのかということは分かりませんでしたが、それでも「正義」という言葉は決して耳慣れないものではありませんでした。マンガやテレビでヒーローといえば「正義の味方」だったからです。私は「鉄腕アトム」や「鉄人28号」などの時代に育ちました。今の時代のヒーローのことはよく知りませんが、そのころは主題歌にも、「正義の味方」だとか「正義のために戦う」などという言葉が含まれていたものです。小さい子どもたちは、アニメの話が分からなくても、登場人物を見ながら「これはいいもんの、わるいもんの」と聞き、その判別がつけば安心したものです。善玉と悪玉の区別さえつけば、どちらを応援しながら見ればいいかがはっきりしたからです。その際、「正義」は文句なしに「いいもん」のしるしなのでした。思えば幼かったころ、善玉を応援して悪玉がこてんぱんにやっつけられるのを見てはスカッとしていました。でも、なぜあえて正義の味方に戦いを挑む悪役が存在するの、などということは考えたこともありませんでした。

もちろん、大人に近づくに連れて、世の中には「悪」が存在することを知ようになります。そして、人間の欲望や、自己中心的な思いが「悪」を生み出すのではないだろうか、と考えるようになりました。そういう「悪」が自分のなかにもある、ということをややでも自覚せざるを得ない経験もします。それでも、「正義」は「正義」として変わらず存在し続けました。世の中には「悪」や「不正」がはびこっているけれども、「正義」は負けるべきではない。「正義」は求め続けられなければならない大事なものの、あきらめてはいけない大事な価値観なのです。そのようになり長い間、私は「正義」は誰もか認めざるを得ない大切な価値観だと信じてきました。自分がやっていることは正しい、と信じている人は自信をもって行動するし、やることに力があり、カッコいいものです。それも「正義」の成せる業だと思っていました。

「正義」への疑い

ところが、大人になって長く社会生活を経験しているうちに、私はだんだん、「正義」を疑うようになりました。「正義」だったら、すべてに打ち勝つていいのだろうか。「正義」を前にしては、そうでないものは無条件に口をつくむしかなく、それで本当にいいのだろうか。世の中には「正義」よりも、「正しくある」ことよりも大事なことが、もしかするとあるのではないだろうか、と思うようになってしまったのです。「自分は正しいから、誰にも恥じることはない」と言い切れるとしたらカッコいいことです。でも、正しければ無条件で安心してられる、自分は「いいもん」なのだ確信できるというのでいいのだろうか、と疑うようになりました。聖書は「神は正義だ」と語ります。私たちが生きる世界は神の正義が実現しない不完全な世界です。けれども、不正がまかり通ることは神の意志ではない。だから、神に正義の実現を祈り求める言葉も聖書にはたくさん記されています。それは神が義である方、正義であるからです。それなのに、「正義」を疑うようになってしまった私は、義なる神への信仰とどう折り合いを付けられいいのか、というところでも気持ち悪さを抱えるようになっていました。

どうして「正義」を疑うようになったのか。どうして「正義」よりも大切なことがあるのではないかと思うようになったのか、それを説明するのはなかなか難しくてやっかいなことです。そもそも、「正義」を疑うようになったのは、自分にとってなかなかしんどい経験を通してでした。つまり、それは重いこと、すなわち重要なことなのです。実は話をするのも結構しんどくて辛いことです。でも、今日はそのことをお話してみたいと思うのです。

人を傷つける「正義」

「正義」でないこと、つまり不正にはいろいろなことがあります。その一つが差別の問題です。教会は「義なる神」に仕える使命をもっているの、さまざまな差別の問題と取り組んでいます。性差別、部落差別、ハンセン病など病気による差別、国籍や人種による差別、などなど。このような差別をなくそうと戦うことは、「正義」の実現のために働くことです。これはもちろん、とても大切で重要なことです。人を傷つけ、苦しめる差別がいいわけがありません。差別をしている人を放置しておくわけにはいかないのです。また、差別を容認している社会の仕組みも認めるわけにはいきません。

ところが、差別をなくすために一緒に働いている人たちの集まりで、互いにひどく傷つけ合うということが起こってしまうのです。世の中の普通の人たちよりもずっと差別によって傷つけられることの辛さに敏感で、差別が起こらないためにどうすればいいのかを一生懸命考えてきたはずの人たちが、差別の問題で互いに傷つけ合ってしまう。私もいろいろなことに少しづつかわるうちに、そういう辛い経験を何度かしてきました。たとえば部落差別をなくそうとして長年一生懸命やってきた人が、女性を差別するようなことを平気で言ったりしたりしていることがあります。差別を受けた人は、あなたがしていることは性差別だと訴えます。ところが差別をした方は、自分がどうして訴えられたのかが分からないこともあるのです。自分が差別を受けたときには、すぐに訴えるのに、自分が差別をしたときにはわからない。あの人がどうして分からないのか、とたくさんのががっかりします。あるいは逆に、どうしてあの人を批判するのだ、と対立してしまうこともあります。お互いに、自分は今まで差別をなくすために誠心誠意、一生懸命やってきたという自負があります。自分がやってきたことは「正義」だったと自信があるので一歩も引きません。問題はこじれていくばかりです。こんな対立の最中にいるのはとても辛いものです。どうしてこの人たちが対立することになってしまったのか、どうしてお互いの言葉が通じないのか。考えていくうちに、私は「正義」が一番大事だとは思えなくなっていったのです。「正義」が絶対譲れない一番大事なものだとしたら、こういう対立は決してほくことはできません。なぜなら、どちらも自分は「正義」だと信じているので譲らないからです。でも、お互いの言葉に耳を傾けるためにはどこかを譲らなければなりません。「正義」よりも大切なものがあるのだとしたら、それが可能になるのです。

「正義」と「現実」

何度かこういう経験をするうちに、私は「正義」よりも、「現実」をしっかり見ることの方が大切なのではないかと思うようになりました。よくわかっているはずの人たちの間で、このような対立や傷つけ合うようなことが起こるとき、前面に出てくるのは「自分は正しい」という「正義」の理屈です。けれども互いに「正義」という理屈を掲げている限り、対話は成り立ちません。同じ現実のなかを生きているはずなのに、です。同じ時間と空間のなかで生きているからこそ、お互いを傷つけ合う問題が起こっているのに、その現実を見ないで、自分にとっての理屈を言い合っただけではお互いが自分を守っているだけです。自分にとってはこうだ、という話だけでは現実は見えてきません。現実と向き合うためには、自分のしたことや考えたことが、他の人にはどう受け取られたのか、ということを見なければなりません。「正義」を掲げていると、「正しさ」を疑うことをしようとしません。そのために、現実を生きている人間そのものが見えなくなってしまいます。その結果が互いに傷つけ合ってしまうという辛い現実を生むのではないかと思うのです。

だから私は今、「正義」よりも大切なことは現実に目を向けること、現実を受け止めることだと考えています。いくら「正義」ではこうあるべきだと思っても、現実は何が起こっているのかが見えていなければ、何かが、どこかが違ってきてしまいます。いくら「正義」が通るためにはこうあるべきだ、という理屈があったとしても、現実がそうならないければ、そこにはなにか問題があるはずなのです。そして、その問題としっかり向き合わなければ何も解決はしないでしょう。「正義」を大きな声で主張するだけでは、現実是不変なものなのです。

神がおられるところ

では、神はどこにおられるのでしょうか。あるべき「正義」が神なのでしょう。それとも「正義」が通らない現実のなかには神はおられるのでしょうか。「義なる神」と、「正義」が通らない現実を生きななければならない私たちとは、一体どういう関係なのでしょう。そのことで思い悩んでいたときに、聖書の中に見つけたのが今日読んでいただいた聖書箇所にあるイエスの言葉です。イエスが語る父なる神は、すべてを受け止め受け入れてくださる神です。「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」。神の「正義」、神の正しさは、理屈ではありません。「正義」が通らない現実のなかを生きる私たちを、現実のすべてを、神は受け止めてくださるのです。私たちは「正義」を知ることができます。「正義」をめざしたいと願います。けれども私たちはいつも常に正しくあることはできません。また、人間の正しさには限界があり、いつもどこかが不完全です。それでも私たちは赦され受け入れられてこの世界に生かされています。それが私たちの生きる現実です。「正義」よりも大切な現実、それは世界が神に受け入れられ、慈しまれ、愛されていることだと思うのです。